

2012年6月28日

第一回駒場ドイツ語研究会

駒場キャンパス 18号館 4階コラボレーションルーム2

発表者：白鳥まや
地域文化研究専攻博士課程

ハンス＝ゲオルク・ガダマーの解釈学における「開放性」の概念について

0. はじめに

『真理と方法』第二版序文において、ガダマーはこの著作において立てられている問いは、「理解はどのようにして可能となるか？」という問いだと述べ、理解の構造を、解釈学的循環をモデルとした対話形式で記述しようとする。「翻訳」の問題は、『真理と方法』において、決して中心的なテーマとして扱われているわけではない。翻訳者についての言及は『真理と方法』第三部で初めて登場し、そこでは異質なものの解釈者の例として翻訳者が挙げられるに留まっている。しかしながら、ガダマーの解釈学においては、翻訳の問題が、隠れてはいるものの、非常に重要な位置にあるのではないか。

一般に原作の模倣者と見なされ、その産物はオリジナルに対するコピーという副次的な地位付けをされることの多い「翻訳者 *der Übersetzer*」の立場が、『真理と方法』では解釈者のモデルとされている。これは、ガダマーが「翻訳」を、ある外国語を読むことのできない者のためになされる異言語間の単なる置き換えとして捉えてはいないからである。ガダマーは「翻訳」を、二者間における対話によるコミュニケーションや、自分の母語であるテキストを読む際にも生じている、解釈の遂行様式と捉えている。翻訳とは異質なものの理解の一形態と捉えられるが、今述べたようなガダマーの翻訳の捉え方が、同化でも我有化でもない、異質なものの理解の仕方を考える契機となるのではないだろうかという問題意識から、本発表では、ガダマーの解釈学を翻訳との関連において取り上げたい。その際、『真理と方法』における「開放性 *Offenheit*」と「適用 *Applikation*」の概念に着目する。

1. 「開放性」について

① 他者に対して開かれていることとしての「開放性」

対話における意志疎通は、対話相手双方が意志疎通の心構えがあること、そして異質なもののや敵対するものが持つ自らにとっての価値や有効性をおしはかろうと努めることを内包している。¹

¹ „Verständigung im Gespräch schließt ein, daß die Partner für dieselbe bereit sind und versuchen,

→これは異質なものをや敵対するものを無条件に受け入れるという意味ではなく、異質なものをや敵対するものの、自分にとっての意味や有効性といった価値をみとめることと考えられる。

・「開放性」の具体化としての「教養 Bildung」

理論的教養の本質は、それ以外のものをも認めることを学び、普遍的な視点を見出して、事柄、すなわち、「対象をその本来の自由な姿で」なんらの私欲もまじえずに捉えるところにある。[中略]異質なものの中に自身をみとめ、異質なものにおいて慣れ親しむようになること、これが精神の基本運動であり、精神の存在はひとえに他の存在から自らに立ち戻ることである。²

↓

「教養」の持つ、普遍的存在を目指して自らを形成し、異質なものに慣れ親しむ、「他者に対して、異質でより普遍的な視点に対して開かれたままであること」という性質

② 「未決性 Offenheit」としての「開放性 Offenheit」

[...]対話術は問いと答えの遂行様式、あるいはよりよく言えば、あらゆる知が問いを経る際の遂行様式である。問うことは未決定の状態におく (ins Offene stellen) ということである。問われた事柄の未決性(Offenheit)は、答えが定まっていないところにある。問われた事柄は確認され決定されるまでは、まだ宙に浮いている(in Schweben sein)はずである。このように、問われた事柄をその疑わしさについて未決定の状態に置いておくことに、問いの意味がある。問われた事柄は宙に浮いている状態に置かれて、賛成論と反対論の釣り合いが保たれるようではなければならない。問いはどれも、このような宙に浮いている状態を経て、未決定の問い(eine offene Frage)となることにより、初めてその意味を完成させる。真の問いはどれも、このような未決性を要求する。もしこの未決性が欠けているならば、問いは基本的に、真の意味をもたない見せかけの問いである。³

↓

das Fremde und Gegnerische bei sich selber gelten zu lassen.“ GW 1, S.390.

² „Theoretische Bildung führt so über das, was der Mensch unmittelbar weiß und erfährt, hinaus. Sie besteht darin, auch anderes gelten zu lassen zu lernen und allgemeine Gesichtspunkte zu finden, um die Sache, »das Objektive in seiner Freiheit« und ohne eigennütziges Interesse zu erfassen.(...) Im Fremden das Eigene zu erkennen, in ihm heimisch zu werden, ist die Grundbewegung des Geistes, dessen Sein nur Rückkehr zu sich selbst aus dem Anderssein ist.“ a.a.O., S.19.

³ „Aus diesem Grunde ist die Vollzugsweise der Dialektik das Fragen und Antworten, oder besser, der Durchgang alles Wissens durch die Frage. Fragen heißt ins Offene stellen. Die Offenheit des Gefragten besteht in dem Nichtfestgelegtsein der Antwort. Das Gefragte muß für den feststellenden und entscheidenden Spruch noch in der Schweben sein. Das macht den Sinn des Fragens aus, das Gefragte so in seiner Fraglichkeit offenzulegen. Es muß in die Schweben gebracht werden, so daß dem Pro das Contra das Gleichgewicht hält. Jede Frage vollendet erst ihrem Sinn im Durchgang durch solche Schweben, in der sie eine offene Frage wird. Jede echte Frage verlangt diese Offenheit. Fehlt ihr dieselbe, so ist sie im Grunde eine Scheinfrage, die keinen echten Fragesinn hat.“ a.a.O., S.369.

答えが定まっていない状態、答えが宙吊りになっているという„offen“な状態を肯定的にみなす点がガダマーの解釈学の特徴のひとつ

・「未決性」としての「開放性」の具体化としての「善意志 *guter Wille*」

「善意志」—自らの先入見を疑い問いながら、自らの「対話相手」である他者やテキストを理解しようと欲すること。対話参加者が「双方ともにわかり合いたい」と欲すること。

→すべての人間に「善意志」が備わっていると前提することは、異質な存在である他者やテキストと解釈者の間にある一定の同質性を前提とするものでは？

Cf. デリダからの批判

2. 「適用 *Applikation*」について

「適用」: 「すべての理解の不可欠な契機 *ein integrierendes Moment alles Verstehens*⁴」、
「適用の意味とは、与えられた普遍性をまずそのものとして理解し、その後具体的な事例に事後的に応用することではなく、我々に与えられているテキストの普遍性自体を本当に理解することである。」⁵

① 「応用 *Anwendung*」

判決や説法といった、法解釈学や聖書解釈学における実践。

応用するものとされるものの間には「所有」の関係。

「応用できるものは、それ以前から自らのためにすでに所有しているもののみ」⁶

例：個々の条項を具体的事例に当てはめる、聖書の一説を引き抜いて日常生活での状況に当てはめる、等。

② 「適用 *Applikation*」

「過去と現在の、汝と我の仲立ち *die Vermittlung von Damals und Heute, von Du und Ich*」⁷

「解釈こそは、人間と世界との間にあって、決して完了することのない仲介を行うものである」⁸

8

⁴ a.a.o., S.313.

⁵ „Der Sinn von Applikation, der in allen Formen des Verstehens vorliegt, hat sich jetzt geklärt. Applikation ist keine nachträgliche Anwendung von etwas gegebenem Allgemeinen, das zunächst in sich verstanden würde, auf einen konkreten Fall, sondern ist erst das wirkliche Verständnis des Allgemeinen selbst, das der gegebene Text für uns ist.“ a.a.o., S.346.

⁶ „Denn anwenden kann man nur etwas, was man schon vordem für sich besitzt.“ a.a.o., S.322.

⁷ a.a.O., S.339.

⁸ „Interpretation ist es, was zwischen Mensch und Welt die niemals vollendbare Vermittlung leistet, und insofern ist es die einzig wirkliche Unmittelbarkeit und Gegebenheit, daß wir etwas als etwas

→「未決性」と「開放性」両方の„Offenheit“を内包している

「むしろすべての理解において起こっているのは、あるテキストを読んでいる者自身が、知覚された意味の中にいるという適用なのである。読者は自分が理解するテキストに属している。」⁹

→歴史研究者も含めたすべての読者が、コンテキストの有限性を意識し、「適用」という文献学的な解釈の仕方を採用すべきである。

「適用」の概念は、ガダマーの言語観・歴史観を反映

→言語も歴史も、解釈者と完全に切り離れた対象として扱うことは不可能。言語を通して言語的なものを理解/解釈しているという人間の必然的な二重性。

「適用」とは、自分が理解しようとしているテキストを、ある絶対的な権威を付与されたものとして扱うのではなく、解釈者がテキストの中に入っていき、テキストの内にある、解釈者にとっての意味や有効性といった価値(Geltung)をみとめるという、まさに„das Fremde und Gegnerische bei sich selber gelten zu lassen“という開放性を伴う解釈の仕方である。

→翻訳者の理解の仕方

- ・ 翻訳者に課せられる義務

「翻訳者は原作との避けられない距離をしばしば苦しいほどにはっきりと自覚している」¹⁰

「翻訳者は理解すべき意味を対話の相手が生きている意味連関の中に携えていかななくてはならない」¹¹

「翻訳者は目標言語である自身の母語の正当性を自ら保持しなければならず、しかしながら異質なものの、テキストやその表現に付随する敵対的なものでさえも認めなくてはならない」¹²

↓

我々は原作との距離を完全に隠蔽することなく、しかも同時にそこに橋渡しを試みる詩の翻訳者たちすべてに感嘆せざるをえないのである。彼らはほとんど解釈者のようなものである。いやそれ以上である。(傍点は引用者による)¹³

verstehen.“ *Text und Interpretation*, GW 2, S.339.

⁹ „In allem Lesen geschieht vielmehr eine Applikation, so daß, wer einen Text liest, selber noch in dem vernommenen Sinn darin ist. Er gehört mit zu dem Text, den er versteht.“ GW 1, S.345.

¹⁰ „Der Übersetzer ist sich notwendigen Abstandes vom Original oft schmerzlich bewußt. Sein Umgang mit dem Text hat selbst etwas von der Bemühung einer Verständigung im Gespräch.“ a.a.O., S.390.

¹¹ „Der Übersetzer muß hier den zu verstehenden Sinn in den Zusammenhang hinübertragen, in dem der Partner des Gespräches lebt.“ a.a.O., S.387.

¹² „Genauso muß der Übersetzer das Recht seiner eigenen Muttersprache, in die er übersetzt, selber festhalten und doch das Fremde, ja selbst Gegnerische des Textes und seiner Ausdruckgebung bei sich gelten lassen.“ a.a.O., S.390.

¹³ „So sollten wir alle Übersetzer von Dichtung bewundern, die uns den Abstand zum Original nicht ganz verbergen und ihn doch zugleich überbrücken. Sie sind fast wie Interpreten. Aber sie sind mehr.“ Gadamer, *Lesen ist wie Übersetzen*, GW 8, S.285.

3. まとめ

本発表は、異質なものの理解や他者理解を翻訳との関連において考えるという問題意識から出発し、「開放性」や「適用」といった概念を手掛かりとして、異質なものの理解や他者理解について考える際、ガダマーの解釈学がどのような有効性を持つのかを探ってきた。

シュライアーマッハーは『翻訳の様々な方法について』の中で、翻訳には、原作を翻訳する言語の方に近づけるか、翻訳する言語を原作に近づけるか、換言すれば、相手を自分に合わせるか、自分が相手に合わせるかの二つの方法しかないと断定しているが、ガダマーにとって翻訳とは、汝と我、ないしテキストと解釈者の間に生じている対話による解釈である。そのため、「言語の隔たりを克服する」翻訳者、「原作との距離を偽らずに提示し、同時にそこに橋を架けようと試みる」翻訳者が理想的な解釈者と見なされる。

異質なものと解釈者の間を仲立ちする「適用」という解釈の仕方において、同化でも我有化でもない、ガダマーの言う意味での「翻訳」という解釈を目指すべきであるという点を暫定的な結論としたいと思う。ではそのような「翻訳」としての解釈は具体的にはどのように可能であり、どのように実践されるものなのかという点については、今後の研究の課題としたい。

略記

GW 1 =Hans-Georg Gadamer, *Gesammelte Werke* 1, Hermeneutik I Wahrheit und Methode. Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik, Tübingen, 1990 (1.Aufleage 1960).

GW 2 =Hans-Georg Gadamer, *Gesammelte Werke* 2, Hermeneutik II Wahrheit und Methode. Ergänzungen, Register, Tübingen, 1993 (1.Aufleage 1986).

GW 8 =Hans-Georg Gadamer, *Gesammelte Werke* 8, Ästhetik und Poetik I. Kunst als Aussage, 1993.

参考文献

Hans-Georg Gadamer, *Gesammelte Werke*, Tübingen, 1986-1995.

H.G.ガダマー『哲学・芸術・言語—真理と方法のための小論集』未来社、1977年。

H.G.ガダマー『理論を讃えて』法政大学出版局、1993年。

H.G.ガダマー『芸術の真理』法政大学出版局、2006年。

H.G.ガダマー、J.デリダほか、Ph.フォルジェ編『テキストと解釈』産業図書、1990年。

H.G.ガダマー「解釈学的挑戦」「それにもかかわらず—善意志の力」『理想』第638号、理想社、1988年。

J.デリダ「力への善意志」『理想』第638号、理想社、1988年。